南郷

札幌市立南郷小学校　学校だより　第９号
令和６年11月29日
【学校電話】011-861-9305
【学校ホームページ】
https://www.nango-e.sapporo-c.ed.jp/

とことん使い切ると新しい価値が見えてくる

校長　関根治彦

これまでに受け持っていた子どもに『鉛筆にこだわり』をもっている児童がいました。担任になった初日にその子の机の上に、面白い物を発見しました。全長２cmほどの鉛筆です。手に持ち字を書こうとしても、上手に書ける鉛筆ではありません。「この鉛筆はどうするの？もう捨てるの？」と聞くと、その児童は、にやりと笑い、短い鉛筆がたくさん入っている筆箱を見せると同時に、銀色に輝く秘密兵器を見せてきました。それに短い鉛筆を差し込むと、なんと素敵な長い鉛筆に早変わり。短くなるほどに、鉛筆に愛着が湧いてくるようです。「1.5cmになったら、役目を終え、家にある『鉛筆BOX』に入れます。」「どうして1.5cmなの？」と聞くと「この鉛筆削り（四角くコンパクトな物）で削れなくなるまで使うからです。」と教えてくれました。そして、はじめは「お父さんに1.5cmになるまで使うように言われたこと」それがいつの間にか「鉛筆BOXに入る短くなった鉛筆を集めるのが趣味になったこと」となり、今では「短くなった鉛筆は自分の学習への取組（がんばり）の成果と思う」ようになったことなどを教えてくれました。物を大切にする心が育つだけでなく、使っている物に新たな価値を見いだしているのだと感心していました。

職員室前には落とし物を展示するテーブルがあります。持ち主不在の落とし物たちが、棚からあふれています。このままの状態が続けば、いずれ持ち主不在のまま処分されることになります。

もともと日本人は、物を大切にする国民性です。大量生産大量消費、物が豊かになるにつれ、物への愛着や物を大切にする心が薄れてきているように思います。そんな今だからこそ、昔の日本人の生活に思いを馳せてみてはどうでしょう。江戸時代の庶民の生活は、世界一のリサイクル社会でした。その一つの例が着物です。着物は「反物」という長方形の布を縫い合わせて作ります。着物は糸をほどくと元の反物に戻ります。ですから、何度も作り直すことができるのです。着物は親から子へと受け継がれました。使い込んで布が柔らかくなるという新しい価値が出てくると寝間着に利用します。更に使い込んで布が更に柔らかくなる（価値が高まる）と、赤ちゃんのおむつになりました。赤ちゃんの肌には、使い込まれて柔らかくなった木綿の布が適していたのです。更にぼろぼろになると、雑巾になりました。雑巾としても使えなくなると、燃料とします。燃やして出来た「灰」は洗濯や肥料として再利用されました。古着屋、布回収業者、灰回収業者なども、着物のリサイクルを支えていたのです。物をとことん使い切る文化、価値に合わせた使い方をする文化が、日本にはあったのです。

給食の作っているシーンを見せる学習をすると給食の残量が減ったり、SDGｓの学習をすると教室を移動する時の消灯率が高まったりするのは、その大切さに気付いた成果であると思います。これを継続していくためには、継続して取り組んでいくことに、子どもたちが価値を見いだせるかにかかっていると思います。

１２月に入ります。年末には大掃除で、物を片付けたり、物をきれいにしたり、「物」と向き合う機会が増えていく月でもあります。その活動の中で、物を大切にすることにも触れていただき、まずは「物をとことん使い切る」子どもが増えていってくれればと考えます。そして「丸付けは、この赤鉛筆で」「ご飯は必ずこの箸で」「直線はこの定規で」など、一つの物にこだわり、一つの物をとことん使ってみることで、他の人にはわからない、物への愛着が湧くと同時に自分なりの新しい価値を見いだしていってほしいと思います。これからの社会を創っていく子どもたちがそんな経験を積むことで、サスティナブルな世界につながっていくのではないでしょうか。